

テーマ	誰一人取り残さない授業づくりのリアル ～体育・道徳でどう救う？～
発表者 (所属)	企画者：石坂 晋之介（埼玉県上尾市立上平北小学校） 司会者：山下 大晃（神奈川県湯河原町立吉原小学校） 話題提供者：小口 佑介（埼玉県上尾市立上平小学校） 話題提供者：細野 貴寛（山梨大学教育学部附属小学校） 指定討論者：樋口 亜紀（三重県四日市市教育委員会）
【発表概要】 《企画趣旨》 体育と道徳は、学級づくりの“周辺”ではない。 これからの未来をつくる教科の1つだと信じている。 本シンポジウムでは、体育科・道徳科を起点として、「誰一人取り残さない授業づくり」をいかに実現するかについて、現場のリアルな授業実践を踏まえながら深く検討する。 「誰一人取り残さない授業づくり」を掲げることは、これまでの授業において誰かを取り残してきた可能性への痛みの自覚を伴う営みである。本シンポジウムでは、授業の最前線に立つ教員の視点から、この理念とどのように向き合い、日々の授業づくりへどのように具体化していくのかを議論する。 当日は、体育科・道徳科における具体的な授業実践を提示し、授業の展開そのものを「包摂の体験場」へと再設計する必要性について考察する。リアルな授業事例を手がかりに、包摂的な学びの場を構築するための視点や方法を参加者と共有し、理解を深めていく。 さらに、提示された授業実践を踏まえ、学級経営の視点から指定討論者より示唆を得ることで、体育科・道徳科の授業価値をより多面的に捉え直す機会とする。これにより、教科固有の学びと学級経営の連続性を見通しながら、「誰一人取り残さない授業づくり」の実現に向けた総合的な議論を展開する。 《話題提供者》 埼玉県上尾市立上平小学校 小口 佑介 体育科からは、これまで取り組んできた「UD 体育 10 のしかけ」の実践をあらためてふり返る。「UD 体育 10 のしかけ」は、約 8 年にわたる実践の蓄積をもとに書籍として発刊され、今年で丸 3 年を迎える。今一度その実践を検証することは、体育の授業がこれまで誰かを取り残してきた現実と向き合い、次	

の改善へ踏み出すための重要な契機となる。

本話題提供では、しかけを活用した具体的な授業実践を提示し、その省察を行う。あわせて、体育科で培われた包摂の視点が、道徳科の授業づくりとどのように重なり得るのかを探り、教科を横断した包摂的な学びの可能性を検討する。

《話題提供者》 山梨大学教育学部附属小学校 細野 貴寛

道徳科は「価値を教え込む教科」ではなく、**子どもが自らの価値観を育て、よりよく生きようとする姿勢を形成していく教科**である。そのため、単なる感想共有にとどまらず、学び方そのものを育てる道徳授業の在り方を見つめ、実践を重ねてきた。

具体的には、

- ・精緻化方略（具体例の活用・自分事化）
- ・体制化方略（価値の構造化）
- ・反復方略（行動化と振り返り）

といった学習方略を用いる必要性が高まっている。これらの方略は、道徳科に限らず体育科にも共通して求められる視点であり、教科を横断して「学び方を育てる」授業づくりの基盤となる。

さらに、子どもが「自分は今、どのように考えているのか」を自覚する力を高めることは、教科の枠を越えて極めて重要である。本話題提供では、この力を支える基盤として注目される「**デジタル学習基盤**」および「**自己調整学習**」が生み出す新しい学びの姿について、道徳科の授業実践を踏まえて提案する。